



文献・資料の引用

小 川 雅 弘

経 済 学 部 教 授

# 【1】 なぜ、 引用を示す必要が あるのか

## ● 引用とは ●

論文では、既にある文献や資料の文章などを、しばしば使います。このような箇所を「引用」といいます。本章では、引用の仕方を説明します。ちなみに、他人が引用した文章をもとの実物を探して読まずに使う事を「孫引き」といいます。孫引きすると、引用元の論文のミスプリントなど間違っただけの文をそのまま使ってしまう、恥をかくことがあります。孫引きは慎みましょう。元の文献や資料に当たれなかった場合には、どの論文からの再引用か明示しておきましょう。

## ● 引用を示す意義 ●

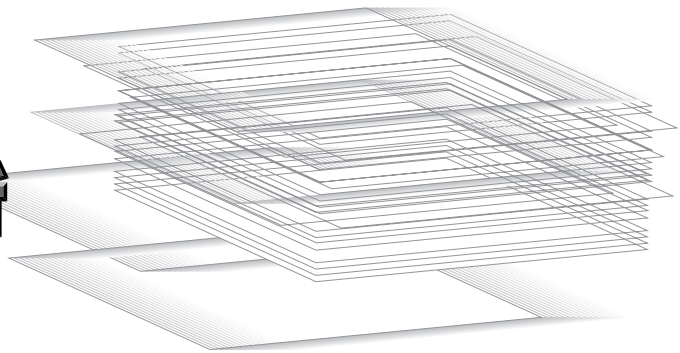
通常の研究は、先人の積み重ねてきた調査や理論展開の上に、自分のものを付け加えたり、従来の様々な議論を整理したり、それらを批判して新しい自分のものを作るものです。このようにほとんどの論文は従来の議論を前提にしていますから、先人の業績の引用は自分の論文の価値を下げるものではありません。とくに学部学生の卒業論文は、従来の議論をどれだけ勉強して理解したかという点に重点がありますから、この点ははっきりしています。もちろん、本文と関係ない引用をむやみにして、本文と関係の薄い膨大な引用文献リストを並べて見せるのも、感心しません。

従来の調査や理論を自分の論文中で使う場合、何が他人のやった調査や考えで、何が自分のやった調査や考えかを、区別する必要があります。そのように区別することによって、自分独自のオリジナルな箇所を明らかにできるのです。学生の卒業論文では、しばしば引

用箇所を示さず、自分の文章と他人の論文からの引用との区別がつかないものがありますが、これでは、その人の主張や理論がどこにあるのか読者に分らず、評価しようがありません。

このようなことになる主因は、勉強不足で自分独自のものが無く他人の文章の寄せ集めになってしまうことでしょうか、引用の指示方法がわかっていないことも理由の一つでしょう。そこでこの章では引用の方法について説明します。引用の表示の方法は、引用した箇所の明示＝地の文との区別と、出典＝引用元の示し方、および両者の関係付け方の3つの部分で構成されています。この3つを順に説明していきます。

## [2] 引用箇所の 明示



引用した1箇所ずつに注をつける方法をこの節で説明します。これと別に文献リストを使う方法がありますが、それについては本章第4節で説明します。

### ●引用文は「」でくくるが、段下げ●

論文の最後にまとめて「参考文献」を挙げているだけの卒業論文をよく見かけますが、前節で述べたようにこれでは不十分です。どの箇所にどの文献のどの部分を引用・利用しているのか、明らかにしておかなくては論文として評価できません。

引用元の文章をそのまま引用する場合、短い場合には引用箇所を「」でくくります。そこに注記号を付けて、章末か論文末の注で引用元を示します。

(例) 山田によれば、「……………」<sup>1)</sup>である。

(中略)

注1) 山田達夫『日本の食糧・日本の農業』労働旬報社、1990年、p32

または、長い文章（おおよそ半ページを越すような）を引用する場合に、引用文を段下げ＝行頭を1字下げることもあります（横書きの場合、文章の左端に1字空けて始める）。

(例) A.センは次のように述べている<sup>2)</sup>。

タゴールの学校は、多くの面で異例なものだった。

……

文化的な保守主義や分離主義とは、非常に対照的なものだった。

センは、このカレッジの最初の2年間に数学と物理を学んだのち、……。

(中略)

注2) Sen,A.(1997),"Tagore and His India",*The New York Review of Books*,  
Vol.XLIV,No.11,pp.55-63

● 他人の調査・分析・考えを使った場合にも明記する ●

文章を引用しない場合でも、他人のやった調査や分析・考えを使えば、その旨を明示します。他人の論文等を自分なりに要約して引用することを「要約引用」といいます。卒業論文で何かの制度や理論等について参考文献を使った場合、引用の元の文章を逐一そのまま引用するよりも、要約引用を薦めます。

(例) この時期における日本の中小企業の問題点は、次の5点である<sup>3)</sup>。

(中略)

注3) この問題については次の文献を参考にした。

藤田敬三・竹内正巳 編『中小企業論』有斐閣、1968年、第2章

この一種で、章・節ごとに依拠した文献を指示する方法もあります。

(例) 第3節スイス経済の発展<sup>4)</sup>

(中略)

注4) 本節における19世紀スイス経済については、次の文献を参考にした。

黒澤隆文『近代スイス経済の形成』京都大学出版会、2002年、第3章

文献献献

# 【3】引用文献の表示方法

## 引用

様々な引用文献の表示方法がありますが、ここでは一つの標準的方法を示しています。

### ● 著者・書名・出版社・発行年・引用箇所が基本 ●

この5つの事項がなければ、読者はその引用文献を探して読めません。発行年が無いと、その本の時代背景が解からないし、ある主張を初めにしたのはどの文献か解かりません。ISBN（国際標準図書番号）は不要です。

### ● 著者『書名』出版社、発行年、引用箇所 が基本 ●

著者『書名』出版社、発行年、引用箇所の順で書き、単行書は二重カギ（『』）で囲みます。著者の肩書き（教授等）は不要です。「××著」とか、「○○出版刊」と書く必要はありません。論文集の場合には、編者名の後に「編」と書いておきます。出版社と出版年とはコンマ（,）で区切ります。発行年は、自分の使った版・刷の年を示すのが原則です。

引用箇所は、文献発行年の後にコンマ（,）で区切って、カタカナで「15ページ」と書くか、アルファベット略号を使って「p.15」と書きます。複数ページにわたる引用は、最初のページと最後のページをハイフン（-）で繋いで示します。その時、アルファベット略号は、'pp.'となります。ある章や節全体を要約引用する場合には、その章や節を示します。

(例) 黒正 巖『百姓一揆の研究』岩波書店、1928年、第1章第2節  
藤田敬三・竹内正巳 編『中小企業論』有斐閣、1968年、pp.15-16

### ● 論文は「」、雑誌は『』 ●

論文を引用する時には、掲載された雑誌名・巻号が必要です。さらに季刊誌・月刊誌は発行月まで、週刊誌・日刊紙は発行日も示します。論文集に所収された論文の場合も同様に、編者名・論文集名・発行年が必要です。

著者「論文名」『雑誌名』巻号、発行年月日  
あるいは、

著者「論文名」編者名『論文集名』出版社，発行年  
の順で書きます。論文名は一重カギ（「」）で囲み、雑誌名は二重カギ（『』）で囲みます。  
雑誌の場合、出版社・発行所名は不要です。

- (例) 藤田敬三「転換期の中小企業政策」『商工金融』第27巻第5号，1977年5月，p.125  
八田達夫「キャピタルゲイン課税のメリット」『エコノミスト』第66巻第35号，  
1988年8月9日，30ページ  
高城 寛「資本主義の発展と中小企業」藤田敬三・竹内正巳編『中小企業論』  
第3版，有斐閣，1987年，pp.90-92

### ● 繰り返し ●

同じ文献を繰り返して引用するとき、次のように略せます。

|                  |            |
|------------------|------------|
| 直前の文献：同上（横書きの場合） | 同右（縦書きの場合） |
| 単行書       ：前掲書   |            |
| 論文         ：前掲論文 |            |
| 著者名       ：同     |            |

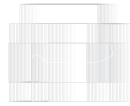
前掲書と前掲論文の前には、著者名（姓だけで可）が必要です。

- (例) 1) 山本晴義「1930年代の社会思想(1)」『大阪経大論集』第145・146号，1982年3月，  
p.45  
2) 同「『日本人』試論」『大阪経大論集』第148号，1982年7月，p.13  
3) 同上，p.15  
   ∴  
5) 河上肇『資本論入門』第1分冊，青木文庫，1951年，pp.16-17  
6) 山本，前掲論文，pp.12-14

### ● 文庫や新書は文庫・新書名 ●

文庫本や新書の場合には、出版社名の代わりに文庫・新書名を書くのが普通です。ハードカバーを文庫化したものを使う時には、もとの発行年も「(原著1965年)」などとして添えておくほうが良いでしょう。

## ● 改訂版、年刊書、分冊 ●



年鑑や白書のように同じ書名で毎年発行される文献の場合、各年ごとに内容が異なりますから、何年版か明記します。改訂版、増補版なども改訂・増補前と内容が相違しますから、明記します。「上・中・下」「1～3巻」というように、何冊かに分かれている場合にも、何巻かを明記します。いずれも、雑誌の巻号と同様に、書名の後、『』の後に書きます。分割掲載されている論文で、(1)・(2)、(上)・(下)等が論文題名に付記されている場合には、その部分も論文題名の一部と考えて、「」の中に書きます。

- (例) 大橋隆憲・野村良樹『統計学総論』上，有信堂，1963年  
置塩信雄『蓄積論』第2版，筑摩書房，1975年  
内閣府経済社会総合研究所編『経済白書』平成14年版，財務省印刷局，2002年  
山本晴義「1930年代の社会思想（1）」『大阪経大論集』第145号，1982年3月

## ● 統計 ●



資料として統計を使う場合、作成官庁名『統計名』調査年次「表名」と表示します。

- (例) 内閣府社会経済総合研究所『国民経済計算年報』2000年版「所得支出勘定」

## ● 新聞からの引用 ●

筆者名のない論説の場合、著者名は省略するか無署名と書きます。無署名記事では、筆者名も題名も書かず、新聞名、発行年月日の後に「記事」と書くか、題名の代わりに記事の見出しを書いておきます。全国紙では大阪版・東京版等で内容が異なることがあるので、新聞名の後に何処の版か書きます。新聞の場合には発行日まで書き、夕刊の場合には、発行日の後に「夕刊」と付けておきます。新聞からの引用の場合、ページは示さないのが普通です。

- (例) 『日本経済新聞』東京版，1988年11月3日記事  
杉本良夫「日本『礼賛』から『功罪』論へ」『朝日新聞』大阪版，1988年9月5日夕刊  
「知る権利妨げぬ公表の定義を」『日本経済新聞』東京版，1988年11月24日

## ● 訳には訳者名も ●

翻訳には訳者による原文の解釈が伴いますから、訳文には訳者の責任と権利があります。また、一つの原著に複数の翻訳書が存在することもあります。したがって、翻訳文を引用する際には、著者名だけでなく訳者名も示します。著者名か書名の後に訳者名を丸っこ（ ）で囲って添えておきます。

(例) D.リカード (竹内謙二訳)『経済学及び課税の原理』東京大学出版会, 1973年,  
pp.73-74

翻訳者による独自の解釈の可能性もありますから、引用箇所については、訳文だけでなく原文にも目を通すのが原則です。また厳格に言えば、翻訳の後に原著の著者名、書名、出版地名、発行年を原語で書き添えておくべきです。

翻訳

## ● 英語文献から引用 ●

基本は、日本語文献と同じです。手書きの場合、単行書名と雑誌名以外は活字体で書きます。

著者名を文頭に示す場合、姓を先に書き、その後にコンマ (,) で区切って名前の頭文字を書きます。複数の著者の場合、'and' で繋ぎ、2人目以降は名を先に書きます。編者名などが文献名の途中に出てくる場合などには、名を先に書きます。

単行書・雑誌は、カッコなどは付けず、イタリック体 (斜字体) で書くか、アンダーラインを引いておきます。単行書名はコンマ (,) で著者名と区切ります。論文は、活字体で書き、“ ” か ‘ ’ で囲みます。論文集から1つの論文を引用する場合、論文と論文集編者名の間に 'in' を入れます。

欧米では、出版社の前に出版地名を書く習慣があります。ただし、最近では省くことも多くなってきています。

発行年月日は、日本語と逆に日月年あるいは月日年の順に書きます。月は、数字でなく、英語の月名 (普通は略して前3文字) で示します。

次に英語論文でよく用いられる略号を示しておきます。

編 : ed. (編者が1人)

編 : eds. (編者が複数)

巻 : Vol.

号 : No.

章 : Chap. または Ch.

節 : Sec.

Vol.

Sec.



- (例) Arrow, K.J., *Social Choice and Individual Values*, New York: Wiley, 1951  
 Lucas, R.E., Jr. and T.J. Sargent, 'An Essay on Dynamic Theory', *The Economic Studies Quarterly*, Vol.39, No.3, Sep. 1988  
 Sen, A.K., "Merit and Justice", in Arrow, K. and K. Bowles eds., *Meritocracy and Economic Inequality*, Princeton: Princeton U.P., 2000, pp5-16

繰り返し略号は、次のとおりです。いずれも、イタリック体（斜字体）で書きます。著者名やページとはコンマ（,）で区切ります。

直前の文献（同上）：*Ibid.*                      前掲書、前掲論文：*Op.cit.*

同じ著者：*Id.*

- (例) *Ibid.*, pp. 10-12  
 Harrod, *Op. cit.*, p. 50

ドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語等の文献を引用する場合、それらの言語の論文が用いている引用方法を参照してください。

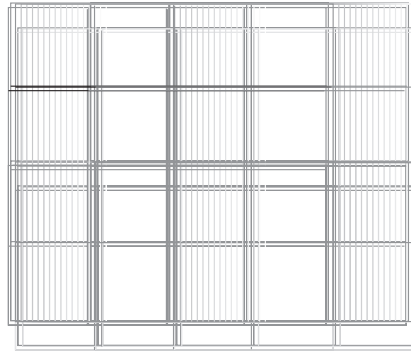
### ● インターネットのWebページからの引用 ●

官庁や企業等の Web ページから文章や図表を引用する場合には、官庁や団体・企業名と Web ページである事を明記しておきます。また Web ページは日々更新されていくので、参照した日付も添えておきます。統計をダウンロードして、自分で加工した場合には、Web ページは不要で資料として統計名だけを挙げておけば十分です。

- (例) 日本銀行 Web ページ (www.boj.or.jp), 2002 年 4 月 1 日

詳細は第Ⅲ章で述べられていますが、個人の Web ページからの引用は、責任の所在や信頼性の問題があるので、慎重にすべきで、少なくともページの開設者が明らかな場合に限るべきでしょう。どうしても必要と考えた場合には、引用元として URL とページの通称、日付を示しておきます。

# [4] 文献リスト を使う方法



引用文献数や繰り返し引用の多い場合には、文献リストを使う方法が適しています。これには、著者名と発行年による方法と、文献通し番号による方法の二つがあります。いずれも、引用文献リストは論文末に置き、著者名・発行年・番号等を用いて、注ではなく本文中で直接に引用文献を示します。引用文献リスト中では、著者名の50音順かアルファベット順に引用文献を並べます。同一著者の文献は、発行年順に並べます。

## (1) 著者名と発行年による方法

著者名と発行年によって示します。発行年は（ ）で囲みます。「引用文」の後では、著者名を〔 〕で囲みます。その著者の文献が同一年に複数ある場合には、著者名、発行年とアルファベット番号で示します。

(例) 鈴木により、「……」〔鈴木(1979)〕と指摘されている。  
山本(1982a) pp. 14-15によれば、……である。

### 文献リスト例

この場合、文献名を、著者名(発行年)の順に書きます。同一著者が続くとき、名前の代わりに横棒を引いておきます。

黒正 巖(1928)『百姓一揆の研究』岩波書店  
山本晴義(1982a)「1930年代の社会思想」(1)『大阪経大論集』第145・146号, 1982年3月  
—— (1982b)「『日本人』試論」『大阪経大論集』第148号, 1982年7月

## (2) 通し番号による方法

引用文献中に、記載順に通し番号を付け、その番号と著者名によって引用文献を示します。「引用文」の直後に引用文献を書く場合、丸カッコで囲んでおきます。

(例) 黒正〔1〕第1章によれば、……。  
山本は、「……」(山本〔2〕p.15)と述べている。

### 文献リスト例

- 〔1〕黒正 巖『百姓一揆の研究』岩波書店,1928年  
〔2〕山本晴義「1930年代の社会思想(1)」『大阪経大論集』第145・146号,1982年3月

# [5] 図表の番号と題名、 出所と資料

## ● 図表の番号と題名 ●

図(グラフ)と表には、番号と題名を付けます。番号は、図と表を別にして、図1、表1とする場合と、図と表をとおして図表1、図表2とする場合があります。また番号は、本や長い論文(数章で構成される)の場合には、第1章では図表1-1、第2章では図表2-1と章ごとに付けるのが普通ですが、短い論文の場合には論文全体で通し番号にする方が簡単でしょう。図表の題名は、内容を簡略に表すように付けます。

● 図表の出所と資料 ●

他人の図表をそのまま使う時には、図表の下に「出所」を示します。

(例) 図表 3-1 コール市場残高 2002 年 3 月末

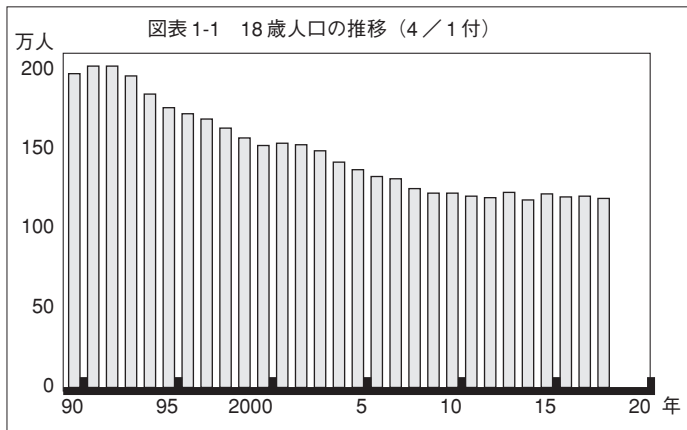
末残 <出し手：東京市場> 単位 億円

|             |       | 有担      | 無担     |
|-------------|-------|---------|--------|
| 業<br>態<br>別 | 都 銀   | 1,000   | 3,080  |
|             | 地 銀   | 21,211  | 8,584  |
|             | 信 託   | 79,169  | 31,192 |
|             | 地 銀 2 | 4,373   | 480    |
| その他とも計      |       | 106,568 | 82,701 |

出所：日本銀行 Web ページ 2002 年 4 月 8 日

自分で作成した図表でも、もとの統計を「資料」として明記します。ここで「作成した」というのは、加工・計算・グラフ作成という意味です。作成方法を本文で示していない場合には、図表の下に注をつけて、作成方法を説明しておきます。

(例) 図表 1-1 18 歳人口の推移 (4 / 1 付)



資料) 総務省統計局『平成 13 年国勢調査第 1 次集計結果』

注) 誕生月別年齢から 4-9 月生まれと 10-翌年 3 月生まれを区分した。

## 【6】 注の付け方

# 注

論文には、しばしば次のような「注」が付けられます。本文の注釈箇所に注番号を上付きの小さな数字で打ち、章末やページ下に注の内容を書きます。

(例) この時期における日本の中小企業の問題点は、次の5点である<sup>3)</sup>。

(中略)

注3) この問題については次の文献を参考にした。

藤田敬三・竹内正巳 編『中小企業論』有斐閣、1968年、第2章

### ●何を「注」に書くか●

注は、論文の中で次のような場合に付けます。

第1は出典・引用元の指示で、これは本章で説明してきたとおりです。

第2は、補足説明です。関連する問題に関する参考文献——たとえば1990年代日本の金融問題を論じる論文中で90年代韓国の金融危機に関する参考文献を注で挙げておくような場合です。あるいは、本文の論理の流れからは外れるがテーマとは関係する問題——たとえば、本文で統計分析しているときに、その統計学的手法について注で説明するような場合です。ただし、注が多いと煩雑で読みにくいので、注はなるべく最小限にすべきで、補足説明はなるべく本文に組み込むのが望ましいでしょう。

補足説明が長くて独立性の高い場合には、補論として本論の後に付けるという方法もあります。経済学の論文では数学的な証明を「数学注」という名の補論としてしばしば付けます。

● 注記号の付け方 ●

注番号は、上付きの数字で記載します。この節はじめの例のように、片カッコ「1）」のほか、両カッコ「(2)」とするか、または注番号だけ「3」とします。

一般の注に関しては、注番号は、注の対象の語句あるいは注の対象の文章末に置きます。

(例)

19世紀におけるスイスの金融業<sup>1)</sup>は……。

引用・出典を直接引用する場合、引用文の「」の末に注番号を打ちます。

(例)

山田によれば、「……」<sup>(2)</sup>である。

要約引用の場合には、要約文の末か、出典の著者名の末に付けます。

(例)

この時期における日本の中小企業の問題点は、次の5点である<sup>3)</sup>。

藤田<sup>4)</sup>によれば、この時期における日本の中小企業金融の特徴は次の5点である。

いずれにせよ、注番号の形式や付ける箇所は、1つの論文の中では統一しておきます。

## ● どこに注を置くか ●

注の内容を置く場所は、論文の末・その章の末・脚注という3通りあります。

短い論文では文末のほうが良いが、1冊の本や長い論文の場合には章末にします。卒業論文では、章末に注の内容を置くのが普通です。注の内容の冒頭に、「注」と目立つフォントで書き、その後に、注番号と注の内容を書いていきます。

(例) …… (本文) ……

### [注]

- 1) 山田達夫『日本の食糧・日本の農業』労働旬報社,1990年,p32
- 2) ここで用いたブートストラップ法は、時系列データをクロスセクションとして扱う手法で…(略)…。
- 3) 1998年韓国の金融危機については、次の文献を参照されたい。  
…… (略) ……

脚注とは、関係する本文のページの下部に置かれた注のことです。脚注は、いちいちページを繰らなくても見えるので、文末・章末の注よりも読みやすいという長所があります。脚注の場合、長い注は不適當で、1ページを越えるような脚注はナンセンスです。印刷用原稿の場合には、注の内容は原稿の末に付けておき、脚注にするよう指示しておけば、印刷業者が脚注として版を組んでくれます。卒業論文等で手書き原稿をそのまま提出する際に脚注にしたい時には、原稿用紙の欄外の注用の余白に注を書きます。ワープロ原稿の場合には、ワープロソフトの脚注作成機能を使うのが便利です。

